

価値創造モデル

日本光電は、経営理念に基づく事業活動を通じて社会課題の解決に取り組み、社会に価値を提供するとともに、グループの持続的発展と企業価値の向上を目指しています。

経営理念の実現


長期ビジョン
 Illuminating Medicine for Humanity

営業利益率 15% 海外売上高比率 45%

日本光電が取り組む社会・医療の課題

社会課題

- 人口構造の変化
- 疾病構造の変化
- 気候変動、自然災害

医療の課題

- 医療費の増大
- 医療の質の確保

医療機器業界の潮流

- デジタル化の加速
- 流通環境の変化
- 新たな働き方への対応
- 法規制の厳格化

INPUT

主な投資資本

財務資本

- 健全な財務体質
- 流動比率 **370%** (2022年度)

人的資本

- 多様な従業員
- 従業員数 **5,751名** (うち海外1,641名 (2023年3月末時点))

知的資本

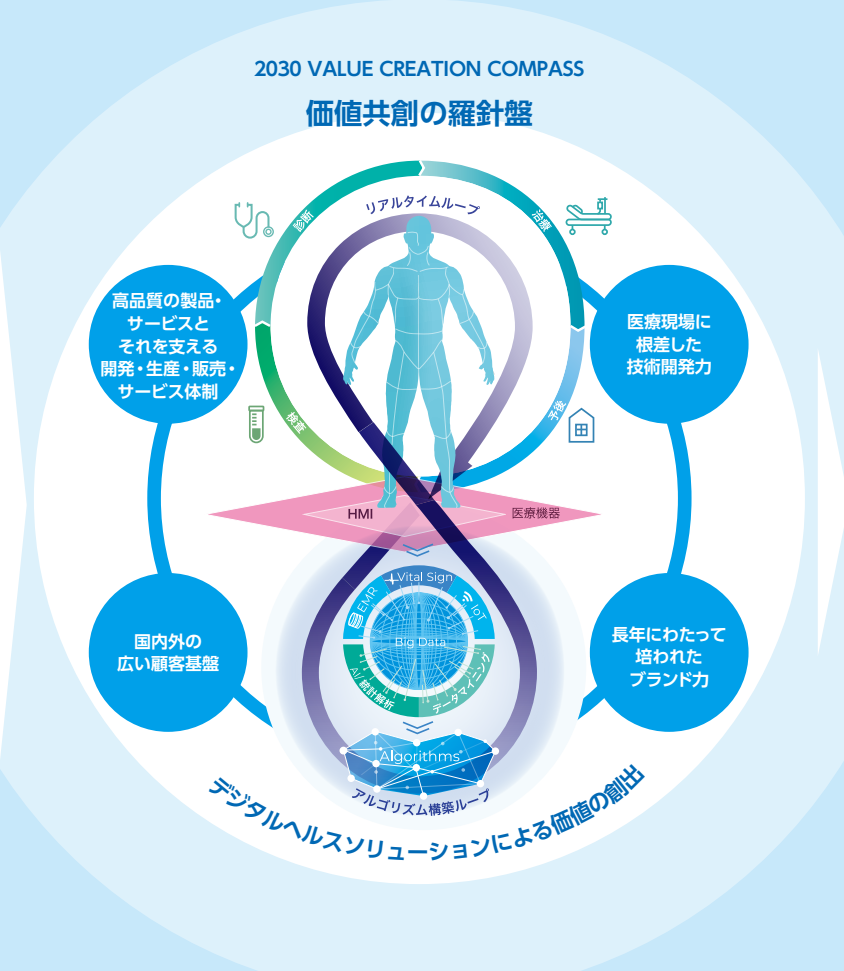
- 積極的な研究開発投資
- 研究開発費 **62億円** (2022年度)
- 革新的な技術開発力
- 新製品発売数 **13品目** (2022年度)

製造資本・社会資本

- 国内外の国内営業所 **114**カ所
- 拠点数 海外 **26**社のグループ会社
- 製品展開エリア 世界 **120**カ国以上 (2023年3月末時点)

自然資本

- 売上高CO₂原単位 **5.88**t-CO₂/億円 (2022年度)
- リサイクル比率 **97.4%** (2022年度)



OUTPUT

中期経営計画 経営目標値

2024年3月期

売上高	1,970億円
国内売上高	1,340億円
海外売上高 (海外売上高比率)	630億円 (32.0%)
営業利益 (営業利益率)	200億円 (10.2%)
当期純利益	138億円
ROE	10%

2023年3月期 実績値

生体計測機器	
売上高	432億円
構成比	21.0%
心電計 ECG-3250	
生体情報モニタ	
売上高	808億円
構成比	39.1%
セントラルモニタ CNS-2101	
治療機器	
売上高	444億円
構成比	21.5%
自動体外式除細動器 AED-3250	
その他	
売上高	380億円
構成比	18.4%
全自動血球計数器 MEK-9200	

OUTCOME

創出する社会価値

財務資本

- 持続的成長への投資資金
- 株主還元

人的資本

- 雇用創出
- 医療への貢献にやりがいと誇りを持てる組織風土の醸成

知的資本

- AIやグリーン技術など 価値共創の源泉となるテクノロジー

社会資本

- 患者さんのQOLの向上
- AEDへのアクセス拡大による蘇生率の向上

自然資本

- 脱炭素社会の実現

製造資本

- 世界最高品質を追求するバリューチェーン

2030年に向けた価値共創の羅針盤

患者アウトカムと医療経済性の向上に向けて

日本光電が、2030年までに医療課題と社会課題の解決にどのように取り組んでいくのかを表す価値創造モデルが、「価値共創の羅針盤」です。医療現場と向き合うことで潜在的な課題を見出し、長年培ってきた独自技術と知見、そして最先端の技術を融合することで課題解決に資する価値あるソリューションを世界中のパートナーとともに創造し続けます。

● 患者アウトカムと医療経済性

私たちが目指す価値創造は、世界共通の医療課題である患者アウトカムと医療経済性の向上を実現することです。

● 疾患別・サイト別ソリューション

私たちは疾患別・サイト別の視点で検査から診断・治療・予後に至るまで、患者さん一人ひとりに最適なケアサイクルソリューションの提供を目指します。

● HMI技術と医療機器

HMIは、患者さんと医療とを結びつける大切な接点であり、日本光電のコア・テクノロジーです。私たちが長年培ってきたHMI技術と医療機器（モダリティ）は、患者さんと医療現場へのアクセスを生み出す価値創造の基盤です。

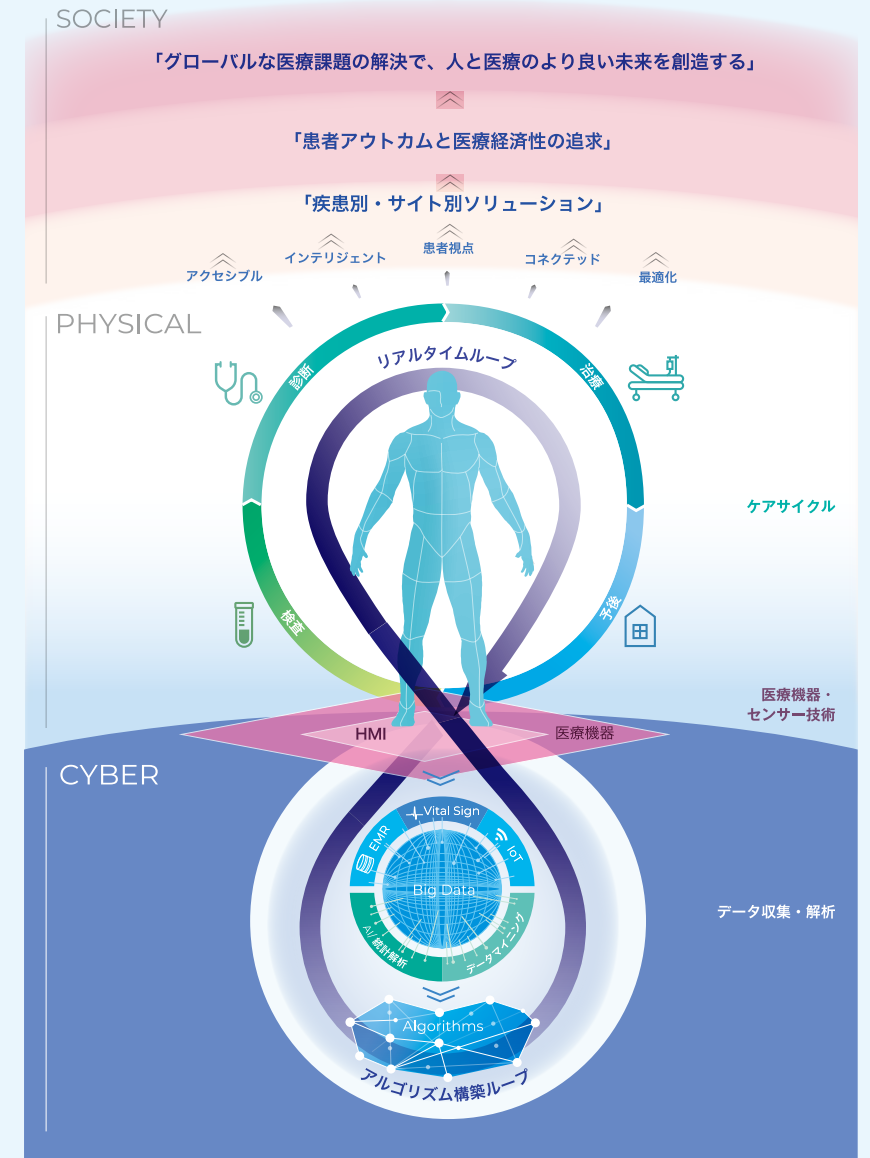
● 新たな価値創造～医療現場のデータから価値を生み出す～

新たな価値創造の領域として「情報から価値を生む」ためのデータ統合プラットフォームの構築とアルゴリズムの開発に取り組みます。バイタルサインデータとIoTデータを用いて、電子カルテ等の情報も集約し、ビッグデータを活用するためのプラットフォームを構築します。そして、AIやデータ分析から予知予測等の臨床価値の高いアルゴリズムを開発します。

● 臨床ニーズに応えるリアルタイムループ

医療現場で使われているHMI技術と医療機器、そしてビッグデータ解析から生み出された新たなアルゴリズムを結び付け、臨床ニーズにリアルタイムに応えることのできるソリューションを提供します。

※ HMI (Human Machine Interface) : ヒューマン・マシン・インターフェース。



2030年に向けて挑戦する新たな世界観

日本光電は、医療現場と向き合うことで潜在的な課題を見出し、長年培ってきた独自技術と知見、そして最先端の技術を融合することで課題解決に資する価値あるソリューションを世界中のパートナーとともに創造し続けます。



「AED」と「人間」。 最後の距離を、どう縮めるのか？

私たちには、課題があります。

救命率を上げるべく、広くAEDの設置を進めてきましたが救える命との間には、いまだ残された距離があります。

ファーストレスポnderの救命教育、心理的ハードルの軽減、早期発見のためのセンシング技術、アプリによるAEDを持って駆けつける人のネットワークの構築、救命率を上げるためのバイタルサインや倒れた時の状況等のデータの活用…。私たちの小さな一歩の積み重ねによってAEDを使う時の心理的、物理的な壁をなくすことで目指すのは、心臓突然死が3分の1になっている未来。

誰もがためらいなくAEDを使用できる大きなムーブメントを起こしていきます。



テクノロジーの進歩。 医療現場のヒューマンエラーはなくせるだろうか？

手術とは、「生きたい」と願う患者さんにとって希望の光。

しかし、いまだ手術中のヒューマンエラーが死亡原因の一つとなっています。特に新興国は先進国と比べ、その死亡率は100から1000倍と推測されています。この深刻な事実も、私たちなら解決できるはずです。患者さんのバイタルサインを活用し、安定した麻酔管理が実現できればヒューマンエラーによる死亡率を100分の1にできる可能性がある。医療技術の発展を通じ手術の安全を高めること。更にその技術を、国境を越えて提供し世界中の患者さんに届けること。

それが私たちの大切な役割の1つだと思っております。

2030年に向けて挑戦する新たな世界観



穏やかに、人間らしく過ごせる。 そんな集中治療室をつくれるだろうか？

患者さんの早期回復を目指す集中治療室。

しかし、数多くの機械やチューブに囲まれた環境の中で、患者さんは心身を休めることができるのでしょうか。

私たちが目指すのは、「身体」とともに「心」のケアも実現できる空間。患者さんの変化を適切に捉え、早期に治療を施すことができる。ベッドの温度や部屋の明るさも、患者さんの容態に合わせて心地よく調整される。

患者さん一人ひとりに最適な環境をつくり、ご本人、ご家族、そして医療従事者にも優しいICUを実現します。



好きな場所で、好きな時間を過ごす。 医療と暮らしをよりスマートにつなげるだろうか？

家に帰りたくて願う患者さんの数だけ、不安があります。

「病院のような医療を受けられないから、体調が悪化するのではないか。」「緊急時に、家族に迷惑をかけてしまうのではないか。」時と場所にしばられない安心を、私たちの「見守り」技術で実現したい。家にも、病室と同じような良質なケアを届けることができれば心不全などの重症化をより早く予測し、予防することができるはず。今後、高齢化により、病とともに生きる人々が増える中で、退院後の再入院率を減らし、患者さんやご家族、病院の負担を軽くしていきたい。

好きな場所で、好きな時間を過ごせる幸せな日常を、私たちは見守り続けていきます。



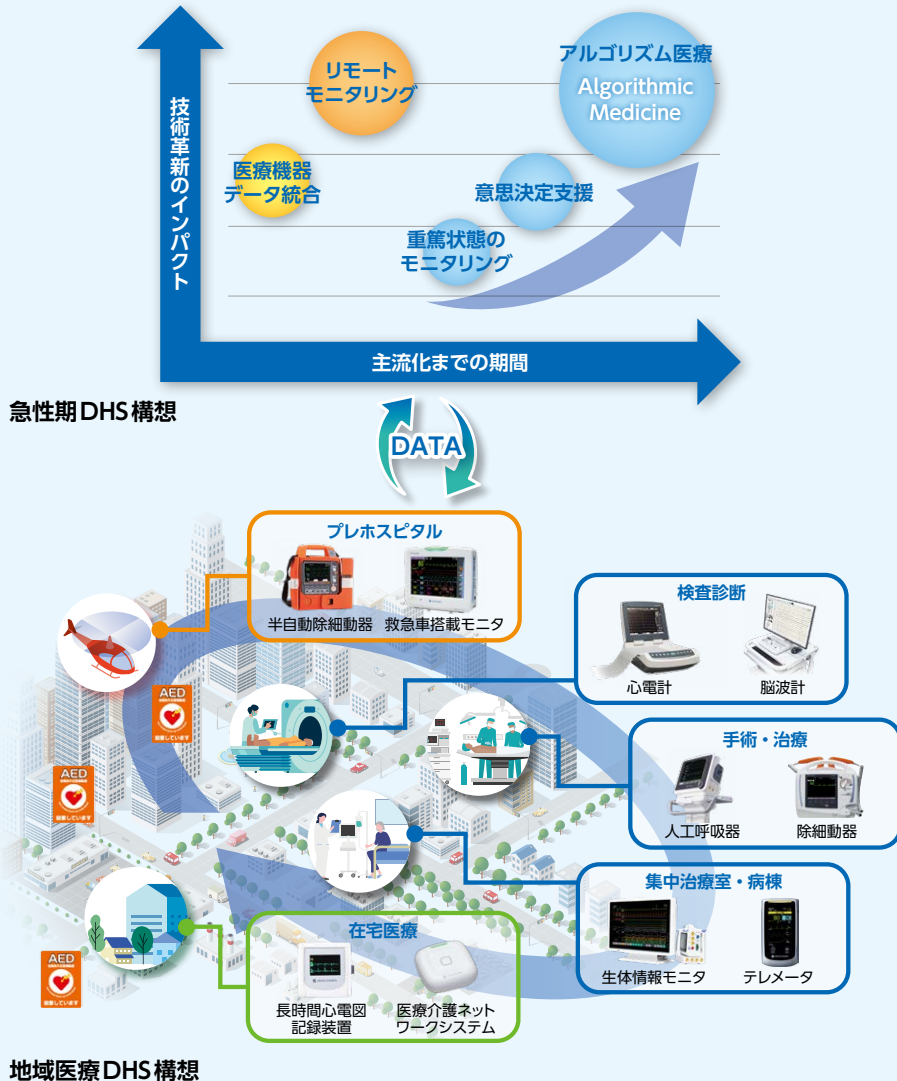
病院経営の質と効率。患者さんも家族も医療従事者も、 みんなが生き生きとした医療は実現できるだろうか？

生産性を高め、経営改善と向き合う病院。

そして、できるだけ患者さんと向き合う時間をつくりたいと願う多くの医療従事者。私たちが目指すのは、すべての人が満足する「WIN-WIN」の関係性。設置した医療機器から抽出したデータを生かし、人材やリソースの適正配置と機器運用の最適化を実現することで、医療従事者が患者さんに集中できる環境をつくり、アウトカムの質を高める。短い入院生活を経て、スムーズに日常に戻れるようにしていく。

医療効率を追求し、業務の無駄をなくすことで、関わるすべての人の「医療満足度」を高めることにつなげていきます。

日本光電が掲げるデジタルヘルスソリューション (DHS) 構想



日本光電では、2030年に向けた長期ビジョン「BEACON 2030」の実現に向けて、「デジタルヘルスソリューション構想」を推進しています。現在、「急性期医療におけるデジタルヘルスソリューション」と「地域医療をサポートするデジタルヘルスソリューション」の2つの領域で、具体的な課題解決に向けた新たな顧客価値の創出を検討しています。

「急性期DHS構想」においては、テクノロジーの進化と歩調を合わせながら、患者さんの生体情報や医療機器の情報を活用したアプリケーション・サービスの提供を目指します。「医療機器データ統合」では、医療機器コネクティビティ（医療機器の接続）やウェアラブルデバイス等の新たなテクノロジーを活用して患者さんの生体情報を取得するなど、データのインプット環境を整備します。「リモートモニタリング」では、ネットワーク技術やクラウド化の進展に伴い、患者さんから離れた場所でも医療従事者による認知・判断・介入を可能とすることで、遠隔医療等の発展に貢献します。「医療機器データ統合」や「リモートモニタリング」のテクノロジーをもとに取得した情報を活用し、日本光電だからこそ提供できるソリューションを段階的に発展させていく予定です。

日本光電のコア技術はヒューマン・マシン・インターフェースであり、患者さんのバイタルサイン等のデータ活用の基礎となる「データを取得する技術」を自社で有しています。今後は、データ収集力の向上、解析技術・アルゴリズムを創出する能力の強化、リモートモニタリング等のネットワーク技術との融合により、患者アウトカムと医療経済性の向上に資するソリューションを創造します。

「地域医療DHS構想」においては、国内では、少子高齢化の進展により、急性期医療の受け皿となる後方支援病院や回復期の病院においても、ハイリスクの患者さんを受け入れる体制の整備が求められています。地域医療支援病院とかかりつけ医をつなぐITシステム基盤を提供することで、早期発見・早期介入を実現し、「地域医療をサポートするDHS構想」の実現を目指します。